The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語における非有界形容詞の有界的使用に関して：主観性の役割を中心に
Author(s)	チョルカ, ラルカ マリア
Citation	間谷論集. 2021, 15, p. 89-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語における非有界形容詞の有界的使用に関して
――主観性の役割を中心に――

チョルカ　ラルカ　マリア

〈キーワード〉 程度性　属性形容詞　感情形容詞

１．はじめに

日本語における形容詞の語性を解明するためには、その第一歩として、共存している無数の言語形式の中で「形容詞」というカテゴリーが持つ独特の特徴に注目する必要がある。いわゆる「程度性」('gradability') は、そのような特徴の一つである。程度性に関する研究と言えば、英語の形容詞が出発点となっており、'very long' と 'completely perfect' のような、機能の異なる副詞との共起可能性、そして 'long-short' と 'perfect-imperfect' で示される反意関係のタイプが分類基準とされることが多い。

日本語における形容詞を程度性の観点から分類している研究は比較的少なく、英語との対照分析が中心的である。このような研究は、「とても」と「完全に」のような副詞との共起、あるいは反意関係などを基準に、例えば「長い」と 'long'、または「完璧な」と 'perfect' のような、同じ意味内容を表す形容詞が日本語と英語で同じタイプの程度性を持つことを指摘し、程度性における普遍性を示している。

ただ、上記のようなアプローチでは、日本語における形容詞の程度性と関わる現象が説明できない場合がある。まず、例（1）に示すとおり、従来「感情形容詞」として分類されたものは、反意関係になる形容詞が存在しないことも多い。

（1）小学校時代に集めたカタログを見ると本当に懐かしい。

（BCCWJ-NT・CAR and DRIVER）

そして、実際の発話場面では、形容詞と程度副詞との共起においても、例外的と思われる振る舞いが観察されることが少なくない。例えば、例（2）に示すように、表される特徴に関して極限が想定されず、「とても」のような副詞と共起することが一般的であると考えられる「簡単な」は、極限の存在を示唆する「完全に」のような副詞と共起する場合がある。

（2）**完全に**簡単、とはいえないが、改善が一歩進められたのは事実だろう。

（BCCWJ-NT・ASAHI パソコン）

本稿では、実例の分析を元に、以上のような、程度性における例外的な振る舞いについて、いわゆる「属性形容詞」と「感情形容詞」の特性を重視しながら考察する。日本語学における先行研究で指摘された「形容詞の評価的な側面」を手がかりとし、日本語の「属性形容詞」と「感情形容詞」が持つ程度性が、いわゆる「主観性」（'subjectivity'）と深く関わることを明らかにする。

２．先行研究と本稿の立場

２−１．程度性に関する先行研究

形容詞を程度性の観点から考察する先行研究での中心的概念としてまず用いられるのは、いわゆる「言及値」（'reference value'）と「基準値」（'standard value'）である。Kennedy（1999）によると、「言及値」は、形容詞によって表される特徴が対象にそなわっている程度を反映する値となる。それに対して、「基準値」は、形容詞の使用を動機づける、比較の基準となる。程度性に関する研究において、ある形容詞が発話で使用されるためには、「言及値」が「基準値」を超える必要があるとする考え方が基本的である。

また、いわゆる「スケール」（'scale'）も、中心的概念の一つである。Kennedy and McNally（2005）は、形容詞によって表される特徴の程度を反映する「程度値」（'degrees'）は、計量の抽象的な表現であると指摘している。「程度値」の具体化されたイメージは、「高さ」や「値段」などの「次元」（'dimension'）を反映する点、あるいは間隔として表されるとし、程度性のある形容詞が構成する「ス

ケール」は、このような性質を持つ「程度値」のセットとして定義している。

従来、反意語として見られる形容詞のペアは、同じ「次元」を描写し、一つの共通の「スケール」を構成するという考え方が一般的である。また、「スケール」の構造に関して言えば、基準値の性質と、それと関わる「スケール」における極限の有無が、考察の中心となることが多い。

Kennedy and McNally（2005）は、'completely' や '100%' や 'fully' のような副詞との共起を基準に、程度性のある形容詞を二つのタイプに分類している。まず、英語の 'tall' と 'short' のように、これらの副詞と共起できないペアは、「相対形容詞」('relative adjectives'）となり、文脈によって設定される「基準値」を持つと述べている。一方、上記の副詞と共起できるペアは、「絶対形容詞」('absolute adjectives'）となり、'closed' や 'straight' のように、「最大的基準値」('maximum standard'）を持つタイプと、'open' や 'bent' のように、「最小的基準値」('minimum standard'）を持つタイプに分けられると指摘している。Kennedy and McNally（2005）によると、「相対形容詞」が「開放スケール」('open scales'）を構成するのに対し、「絶対形容詞」は「閉鎖スケール」('closed scales'）を構成する。

２−２．問題点と本稿の立場

以上にまとめた、「スケール」の構造に関する考え方は、形容詞の程度性を対象としている先行研究で引用されることが多いものである。しかし、前述のとおり、反意関係が成立しない形容詞も多いのではないかと思われる。「懐かしい」のような「感情形容詞」がこの現象の代表的な例として挙げられるが、以下の例(3）に示すとおり、「属性形容詞」の中にも、反意語が想定されないものが存在していると考えられる。

(3）とにかく、犬と人間との食事はまったく異なる物であるということを頭に入れて、犬にふさわしい食事を与えるようにしましょう。

（BCCWJ-NT・ボーダー・コリーと暮らす７つのカギ）

この現象を根拠に、本稿では、それぞれの形容詞が独立した「スケール」を構

成すると考える。例えば、「高い」と「低い」という、反意語として見られる形容詞が、それぞれに独立して、「高さ」の「次元」、および「低さ」の「次元」を描写する二つの独立した「スケール」を構成すると考える[1]。

そして、先行研究に倣い、それぞれの形容詞が構成する「スケール」における極限の有無は、タイプの異なる副詞との共起に反映されるとする。日本語で程度性の表現として見られる副詞の分類については、北原（2013）に従う。北原（2013）は、「スケール」の構造に関しては基本的に Kennedy and McNally（2005）と同じ立場をとり、「開放スケール」を修飾する、換言すれば、極限が想定されないことを示唆する副詞として、「とても」「非常に」「かなり」「少し」を挙げている。一方、「閉鎖スケール」を修飾する、つまり「スケール」における極限の存在を反映する副詞として、「極点近接副詞」となる「ほぼ」と「ほとんど」、そして「極点修飾副詞」となる「完全に」と「全く」を挙げている。

ただ、先行研究で用いられている「開放スケール」と「閉鎖スケール」という概念は、反意関係の有無による「相対形容詞」と「絶対形容詞」の区別とも関わる。そこで本稿では、それぞれの形容詞が構成する「スケール」における極限の有無を表す概念として、Paradis（2001）が定義している「有界性」（'boundedness'）が、より適切であると考える。Paradis（2001）は、形容詞と副詞が共起するためには、程度性のレベルで同じ性質を持つ必要があると主張している。まず、'very' や 'terribly' や 'fairly' のような副詞を「スケール的タイプ」（'scalar modifiers'）として分類し、これらと共起する形容詞は「非有界」（'unbounded'）であると指摘している。また、'completely' や 'absolutely' や 'almost' を「全体的タイプ」（'totality modifiers'）の例として挙げ、これらと共起する形容詞は「有界」（'bounded'）となると述べている[2]。

本稿では、北原（2013）の分類を元に、一般に「とても」「非常に」「かなり」「少し」と共起する形容詞を「非有界」とし、「ほぼ」「ほとんど」「完全に」「全く」と共起する形容詞を「有界」として捉える。そして、日本語における「非有界形容詞」を分析対象とし、これらが「完全に」や「全く」のような副詞と共起し、「有界的に」使用される文脈、つまり、程度性の観点から有標となる文脈に関して考察する。さらに、「非有界形容詞」の有標使用において、「属性形容詞」

と「感情形容詞」では異なる振る舞いをすることを明らかにし、その振る舞いは、発話者と関わる「主観性」（'subjectivity'）によって動機づけられると指摘する。

従来の日本語学研究で、いわゆる「評価性」が形容詞の基本的な特徴の一つとして指摘されることが多い。例えば、樋口（2001）は、形容詞における「評価」を以下のように定義している。

> 形容詞が人や物の特性をさししめすとき、さししめされる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、なんらかの基準との比較のなかでもとらえられてもいる。この基準と比較することによって、物が他の物との関係のなかでもつ意義があきらかにされたり、それが人間の欲求、利害、目的とかかわってもつ意義があきらかにされたりするのだが、このような、物の意義をあきらかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》とよぶことにする。
>
> （樋口 2001:43）

そして八亀（2008）は、形容詞述語文では、話し手が属性のもちぬしと属性を結びつけるという活動が前提であると述べている。本稿で用いる「主観性」は、樋口（2001）や八亀（2008）が考察している「評価性」に近い。ただし、上記の定義による「評価」は、動詞述語文にも適用できると言えるであろう。なぜなら、動詞述語文に関しても、「話し手が、動作主を動作と結びつける」のような解釈ができるからである。本稿では、「主観性」という概念を、形容詞との関係を重視しながら用いる。

実際に、形容詞の程度性に関する最近の研究でも、「主観性」の影響が重視されつつある。Fleisher（2013）は、程度性のある形容詞における「主観性」を 'STANDARDS' と 'MAPPING' というタイプとに分けている。前者は、形容詞によって表される特徴の「基準値」の設定と関わる。後者は、その特徴が、対象にどの程度そなわっているかを判断する発話者の活動と関わる。Fleisher（2013）によると、例えば 'tasty' のような、味を表す形容詞の場合には、発話者が「基準

値」と同時に、美味しさのレベル自体も測っているため、両方のタイプの「主観性」が含まれる。それに対して、'tall' のような形容詞の場合には、人間の身長は対象に客観的にそなわっているため、発話者が「高いかどうか」を判断するための「基準値」のみを設定している。

本稿では、Fleisher（2013）に倣い、日本語における「非有界形容詞」に関して、「属性形容詞」と「感情形容詞」の区別を重視しながら、無標文脈と有標文脈の両方で、形容詞によって表される特徴が対象に客観的にそなわっているか否か、そしてその形容詞の使用を動機づける「基準値」が発話者によって設定されているか否かを考察する。

３．非有界形容詞の無標使用における主観性の役割

本節では、一般に「とても」「非常に」「かなり」「少し」のような副詞と共起し、非有界スケールを構成する形容詞の特性について、主観性の役割を中心に考察する。属性形容詞と感情形容詞を区別し、前者に関しては「高い」をプロトタイプとし、「新しい」「明るい」「簡単な」「親切な」を代表的な例として取り上げる。後者に関しては「嬉しい」をプロトタイプとし、「懐かしい」「羨ましい」「好きな」「心配な」を代表的な例として取り上げる。

３−１．属性形容詞の無標使用における主観性の役割

無標使用において非有界スケールを構成する属性形容詞は、対象に客観的にそなわっている特徴を表すと考えられる。ただ、その基準値が発話者によって設定されることが多く、形容詞の使用自体は、対象の客観的な観察よりも、主観性によって動機づけられると言える。先行研究で指摘されているとおり、ある対象に対して、ある形容詞が選択されるためには、言及値が基準値を超える必要がある。このタイプに属する形容詞が対象に客観的にそなわっている特徴を表し、その言及値も客観的なものとなるということは言うまでもない。ただ、基準値が発話者によって設定されるため、言及値がそれを超えているか否か、つまり、形容詞が選択されるか否かということ自体において、主観性が中心になると考えられる。

以下は、プロトタイプとして捉える「高い」の実例を分析する。例（4）において、「高い」は「かなり」に修飾され、非有界スケールを構成する。そして、「高い」によって表される意味内容は、その対象となる「日本の大学の水準」の特徴を指す。なお、基準値が主観性によって設定されていることは、「私」と「思う」の使用によって、明示的に示されている。

（4）大学の水準は、私は日本は**かなり**高いと思いますし、企業の水準も高いと思うのですけれども、企業と大学との間の連携がうまくとれていない。

（BCCWJ-NT・科学技術の新世紀）

また、「高い」は、値段を指す場合にも、以上にまとめた特徴を持つ。例（5）では、「高い」によって表される特徴は「１万５千円ぐらい」という対象にそなわっているが、「思う」の使用が示しているとおり、その基準値は「１万円以内ぐらい」という、発話者の期待によって設定される。

（5）後、わたしの場合、どちらを選んでも１ヶ月あたりの費用は１万５千円ぐらいになりそうです。外国語を習うのに、これって**少し**高いと思うのですが、どうでしょうか。習い事は月１万円以内ぐらいでって考えていたので、ちょっと悩んでいます。

（BCCWJ-NT・Yahoo! 知恵袋）

次に、非有界スケールを構成する属性形容詞の代表的な実例を挙げる。まず、例（6）における「新しい」は、その対象である「語り口」の特徴を指している一方で、「なにかね」や「普通だったら」の表現が示すように、発話者の経験や期待によって選択される。例（7）の「明るい」も、部屋にそなわっている特徴を指している。主観性の影響は、例えば「とにかく」のような表現を通して、構文のレベルでも明示的に表されていると考えられる。

（6）今回は映画監督という立場で、原作として田口さんの小説『コンセント』に

出合ったんですが、語り口が**非常に**新しい。なにかね、混沌とした中でどこへ向かっていくかわからない魅力がある。普通だったら、どういう話なんですか？って聞かれたら犯人捜しですとか、ラブ・ストーリーですって言えるんだけど、このお話はそうじゃないんですよね。

（BCCWJ-NT・COSMOPOLITAN 日本版）

(7) 広さはじゅうぶんで、北と東と西が窓になっていてどうも南向きの窓だけがないらしいがとにかく三方から光が入っていて昼すぎの時間では**かなり**明るいし、全部の窓を開けてみても車の音は気にならない。

（BCCWJ-NT・この人の閾）

そして、例（8）では、話し相手に「無理」と思われている「耳にふたをする」という行為に対して、発話者が「簡単な」を選択していることから、その基準値が主観性によって設定されることが明らかである。また、「第二の天性になる」という説明もあり、少なくとも発話者が用いている文では、「簡単な」が「耳にふたをする」という対象の特徴を指していると思われる。例（9）における「親切な」も、「声をかけられて調査に答える人」にそなわっている特徴を表すと考えられる。主観性の役割は、発話者の調査の拒否率に関する説明からも伝わるが、例えば「くれる」の使用を通して、構文のレベルでも明示的に示されていると言える。

(8)「でも、どうやって耳にふたをするんだ。それは無理だろう」
「いいえ、**とても**簡単なことでございます。ちょっと修業をすれば。もちろん、その修業は物心つくころに始まり、すぐに第二の天性になります。そうしなければ生きていけませんでしょう。」

（BCCWJ-NT・将軍）

(9) それから、答えたい人しか答えないということも、街頭調査などは典型的にこのパターンだ。声をかけられて調査に答えてくれるのは、**かなり**親切な人

だろう。今は電話でも拒否率がかなり高いといわれる。郵送調査の回収率も三〜四割まで下がっているという。

（BCCWJ-NT・朝日総研リポート AIR21）

以上のように、非有界スケールを構成する属性形容詞は、対象にそなわっている特徴を表している一方で、主観性によって選択されるということが明確になったのではないかと思われる。つまり、第2節で引用した、日本語の形容詞が、人や物に客観的にそなわっている特徴を表す一方で、「評価性」を持つという樋口（2001）や八亀（2008）の指摘は、このタイプに当てはまると考えられる。

３－２．感情形容詞の無標使用における主観性の役割

次に、無標使用において非有界スケールを構成する感情形容詞についてである。

このタイプの形容詞が表す内容は、対象に客観的にそなわっている特徴であるとは言えない。感情形容詞の場合にも、ある形容詞が使用されるためには、言及値が基準値を超える必要がある。そこで、基準値は、発話者が「嬉しい」や「羨ましい」のような形容詞を選択するために超える必要がある気持ちのレベルを指す値として定義できる。言及値は、「とても嬉しい」や「少し羨ましい」のような表現でも分かるとおり、発話者が持つ気持ちの実際のレベルを指すと思われる。つまり、感情形容詞の使用は、主観性のみによって動機づけられる。

次の例（10）で、プロトタイプとなる「嬉しい」は「とても」と共起し、非有界スケールを構成している。「嬉しかった」によって表される内容は、発話者が「変化が起こること」という対象に対して持っていた気持ちを示し、その対象の客観的な特徴を指していない。言及値は、「とても嬉しかった」という、発話者の実際の気持ちのレベルを反映し、基準値は、「何かを変えなきゃ」という、発話者の過去の希望によって設定されると思われる。つまり、「今となっては、それは間違いだったとわかる」の説明からも分かるように、発話者の期待とそれによる基準値が過去とは異なるため、発話時点であれば、「変化が起こること」に対して、「嬉しい」という形容詞は選択されないはずである。

（10）その瞬間、アメリカで考えていた“何かを変えなきゃ”の答えは、この彼との結婚なんだと、安易に結論づけてしまった。今となっては、それは間違いだったとわかるけれど、もとが単純な私。もうその頃は、彼との結婚以外は、何も考えられなかった。大きな不安があるわけじゃないけど、百パーセント満足しているわけでもない自分の生活に変化が起こることが、**とても**嬉しかった。

（BCCWJ-NT・アメリカ大陸行き当たりばったり）

以下は、このタイプの特徴を表す代表的な実例を分析する。まず、例（11）では、「懐かしい」が表す内容は、その対象となる「土地」、つまり、「名古屋」の特徴を示していないことは言うまでもない。形容詞の使用が主観性によって動機づけられたことは、「私にとって」という表現を通して、明示的に表されている。例（12）でも、「羨ましい」は、「自慢出来ることがある」という対象の特徴を指さず、「自分」や「思う」を通して表現される主観性によって選択されている。

（11）名古屋は、取引の関係もありまして、私にとって**非常に**懐かしい土地でもありますし、また関係の深い土地でもございます。それと同時に、いつも考えますことは、名古屋の方々は、商売的に見て、すぐれた方が非常に多いということであります。

（https://books.google.co.jp/books/about/ 松下幸之助発言集ベストセレ .html?id=_pd8lap7RwMC&redir_esc=y）

（12）すぐ昔のことを自慢する人をどう思いますか？
自慢出来ることがあるなんて、凄いと思う。くだらない自慢は聞いてて飽きるけど、自分には出来ないこととか、自分の興味範囲であれば**とても**羨ましく思うよ。

（BCCWJ-NT・Yahoo! 知恵袋）

下記の例（13）の「好きな」は、その対象である「二人の高座」の特徴ではな

く、その「高座」に対する発話者の気持ちを表している。主観性の役割は、「私」や「気がいたします」などを通して、明示的にも示されている。例（14）においても、「もう結構お年寄りなので」という説明は、「心配な」の基準値が主観的な判断によって設定されたことを表していると言える。

（13）でも、私の子供のときからの郷愁を含めて、やっぱり、漫才ということになりますと、諸芸をおりまぜながらの、オカシイ言葉のやりとりというお二人の高座が**とても**好きでございましてね。私が子供のときから見てきたような、いろんなすばらしいコンビの漫才というものの流れを、お二人は今でも伝えていらっしゃるような気がいたします。

（BCCWJ-NT・小沢昭一がめぐる寄席の世界）

（14）最近暑い日が続いてうちの猫がぐったりしてます。見ててかわいそうです。（中略）毎年この時期になるとぐったりするんですが、もう結構お年寄りなので暑さでどうにかなっちゃいそうなのが**少し**心配です。

（BCCWJ-NT・Yahoo! 知恵袋）

以上に考察した言及値と基準値の性質は、従来「感情形容詞」に独特な特徴として挙げられる「主語の制限」と関わるのではないかと思われる。感情形容詞の使用が、発話者の主観性を通して設定される言及値および基準値によって許可されるとすれば、第二人称・第三人称に係る形容詞の使用が容認されないということも当然であると言えるであろう。ただ、言及値と基準値が、従来の研究で指摘されている、「主語の制限」が解放される文脈においては、いかに機能するかという疑問点が残る。下記の例（15）は、そのような文脈の一つである。

（15）買い物をする。セールスマンが相手をちやほやする。ちやほやされて嬉しい人もいれば、嬉くない人もいる。たちまちセールスマンに対する二人の評価が違ってくる。セールスマンにごまかされることもある。すると一人は、ごまかされたということで、神経症的自尊心が傷つき、怒る。しかし

もう一人は、それは済んだこととして先のことを考えようとする。（原文ママ）

（BCCWJ-NT・気が晴れる心理学）

例（15）のように、形容詞が連体修飾語として機能している文脈においては、その使用が対象の客観的な観察とも関わるのではないかと思われる。換言すれば、以上に考察した属性形容詞と同様に、形容詞の使用と関わる言及値は、対象にそなわっている値として認識されることも可能であると思われる。例（15）では、「嬉しい」の使用と関わる言及値は、「セールスマンにちやほやされる人」の反応の客観的な観察によって設定される可能性がある。

４．非有界形容詞の有界的使用

第１節で述べたとおり、実際の発話場面において、形容詞と程度副詞との共起可能性からすれば例外的と思われる文脈が少なくない。従来の研究でも、形容詞の程度性が一定して変わらないものではないと述べられているが、程度性における有標使用については、本稿で言う「有界形容詞」に対する指摘にとどまっている。

本節では、日本語における非有界形容詞が、「完全に」と「全く」のような副詞と共起し、有界的に使用される文脈に関して考察する[3]。このような使用を、程度性の観点から見た有標使用として捉える。そして、このような有標使用において、属性形容詞と感情形容詞で異なる振る舞いをすることを明らかにし、そのような振る舞いの原因として、主観性の役割を挙げる。

４－１．属性形容詞の有界的使用

４－１－１．属性形容詞の文脈による有界的使用

既に述べたように、属性形容詞は、対象に客観的にそなわっている特徴を表す。そこで、その対象が存在している文脈によって、形容詞が構成するスケールにおける有界点が設定されることも可能となると考えられる。実例を分析した結果、このような有界的使用は、客観的な計量の表現、または同様の性質を持つ複

数の対象が挙げられている文脈で容認されやすいことが分かった。

また、発話者の役割について言えば、無標の場合に中心的となる、基準値を設定することよりも、対象にそなわっている言及値が、文脈によって設定される有界点と一致していることを発言する、という活動にあると考えられる。

まず、次の例（16）において、プロトタイプとなる「高い」は有界スケールを反映すると思われる「完璧に」という副詞と共起している。文脈では、「防衛システムの迎撃率」に対して、有界点として認識される「100%」という客観的な計量値が挙げられている。そこで、「高い」の対象となる「システムが誇る迎撃率」にそなわっている言及値が、「100%」という有界点と一致していることから、「完璧に高い」のような有界的使用が容認されると言える。

（16）上述のとおり、同数対同数の状況下において防衛システムが 100% に近い迎撃率が求められるのに対し、実際には 100% の迎撃率を期待できないのが現実である。かりにシステムが**完璧に**高い迎撃率を誇るとしても、相手側が第一陣として発射した複数のミサイルを打ち落とすためにわが国が貴重な迎撃ミサイルを使い果たしてしまいかねないことが推測される。

（http://www.yamanashi-ken.ac.jp/wp-content/uploads/kgk2013009.pdf）

また、下記の例（17）で、文脈において取り上げられている「『L』スペクトル」によって、それぞれの色に相当する輝度値に対して、「０～100」という客観的な計量値が挙げられている。「明るい」の対象となる色、より具体的に言えば、「白」にそなわっている言及値が、有界点として認識されると思われる「100」と一致しているため、「完全に明るい」のような使用が可能となると言える。

（17）国際照明委員会（CIE）が 1931 年に開発した「L」スペクトルは０～100 の輝度値を示し、０は完全に暗い（黒）、100 は**完全に**明るい（白）を表します。

（https://turner.co.jp/art/golden/technicaldata/justpaint/jp26/jp26article3.html）

例（18）では、有界点が比較対象の存在によって設定されると思われる。まず、「スーパーマーケットでは日常的に売られていなかった商品」に対して、単独の「新しい」が選択された。例文で明示的には表現されていないものの、そのような商品との比較の中で、「おにぎりや弁当」に関して、「全く売られていなかった」という解釈が適切であろう。つまり、この客観的な根拠によって、「新しい」と関わる有界点が設定され、その対象となる「おにぎりや弁当」に対して、「完全に新しい」の使用が容認されると考えられる。

（18）ところが、お客様の認知度が古同まるにつれて、それだけではだめだということがわかってきて、スーパーマーケットでは日常的に売られていなかった新しい商品や、よそでは売られていない差別化された自前の商品を開発していくようになったのです。たとえば、おにぎりや弁当は、その当時のスーパーマーケットでは売っていなかった**完全に**新しい商品だったのです。

（BCCWJ-NT・商売の創造）

収集したデータを分析した結果、属性形容詞の文脈による有界的使用は、以下に考察する発話者による有界的使用に比べて、実例の数から見ても、特に珍しいのではないかと思われる。また、形容詞によって表される特徴が、客観的な計量値として表現され得る文脈で容認されやすいようである。

４－１－２. 属性形容詞の発話者による有界的使用

属性形容詞は、文脈による有界的使用の他に、発話者の裁量による有界的使用も容認する。文脈による有界的使用の場合と同様に、形容詞が構成するスケールにおいて、有界点が設定されるが、その有界点の設定は、発話者の裁量によって動機づけられると思われる。具体的に言えば、発話者が、対象に客観的にそなわっている言及値を、有界点として設定するわけである。実例を分析した結果、このような有界的使用は、発話者が対象にポジティブな評価をつけている文脈で容認されやすい傾向があると言える。

例（19）で、プロトタイプとなる「高い」は有界スケールを反映する「完全に」と共起している。「要はピカソと一緒ですよね」という説明からも分かるとおり、発話者が、「高い」の対象となる「くっきー！さんのベースの能力」を褒めることを目指している。そのため、その「ベースの能力」に客観的にそなわっている言及値を、「高い」が構成するスケールの有界点として設定していると考えられる。

（19）藤井：（笑）。くっきー！さんって変なことをするけど、ベースの能力が**完全に**高いじゃないですか。直接言われると恥ずかしいかもしれないですけど（笑）。実力のない人が変な事やってもダメなんで。要はピカソと一緒ですよね。ちゃんとした絵を描ける人が変な絵描いてるみたいな。

（https://mastered.jp/exclusive/offair/cookie-vol03/）

また、例（20）では、「ほんとありがたい。。。」という発言が表しているとおり、「親切な」の有界的使用は、発話者の感謝の気持ちによって動機づけられると言える。具体的に言えば、発話者が、「茨城の人である kabdepot の常連のおっちゃん」の行動から伝わった「親切さ」を「茨城のみんな」と関連させ、それの言及値を「親切な」の有界点として設定していると考えられる。

（20）『売り切れちゃったみたいだね。ちょっと待ってね。』常連のおっちゃんが隣にある建物のドアをコンコンして何かを言って戻ってきた。『弁当補充してくれるって。』
『ありがとうございます。』kabdepot　茨城の人ってみんな**完全に**親切だよね。ほんとありがたい。。。

（https://ameblo.jp/kabdepot/entry-12398594317.html）

なお、前述したとおり、属性形容詞における発話者による有界的使用は、ポジティブな評価が行われている文脈で容認されやすいと言えるが、そのような文脈だけに限られているわけではない。下記の例（21）では、発話者が、「簡単な」

の対象となる「そうです」という具体的な返事にそなわっている言及値を有界点として設定している。ただ、「喉に引っかかってスムーズに出てこなかった」という説明が示唆しているように、その設定は、発話者の不満によって動機づけられたと言える。また、例（22）においても、発話者の不満によって、「ホームセンターで売られている PSP のメモリースティック」の具体的な値段「3680 円」にそなわっている言及値が「高い」が構成するスケールの有界点として設定されている。

（21）まず俺は、簡単に肯定の返事をした。「そうです」**全く**簡単な返事だったのに、喉に引っかかってスムーズに出てこなかった。出てくるのを嫌がってでもいるみたいに。

（BCCWJ-NT・マーブル騒動記）

（22）PSP のメモリースティックを買おうと近くのホームセンターへ行ったのですが 2GB で 3680 円します。これは**完全に**高いですよね。だいたい何円ぐらいで買うのがベストなのでしょう。

（https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1348804898）

データ収集を行った結果、属性形容詞の発話者による有界的使用は、例（19）、例（20）、例（21）のような、抽象的な特徴が表されている文脈、換言すれば、主観性が特に高いと思われる文脈で容認されやすい傾向があると言える。ただ、例（22）のような、客観的な計量値として表現され得る特徴が表される場合にも、発話者の裁量によって、有界点が設定されることが可能である。

４－２. 感情形容詞の発話者による有界的使用

次に、無標の文脈において非有界スケールを構成する感情形容詞についてである。このタイプにおける有標使用は、全て発話者による有界的使用となると思われる。具体的に言えば、属性形容詞の場合と同様に、発話者が、形容詞の使用と関わる言及値を、そのスケールにおける有界点として設定するわけである。な

お、既に述べたとおり、感情形容詞は、対象の客観的な特徴ではなく、発話者の対象に対する気持ちを表している。つまり、有標の文脈で有界点として設定されるのは、発話時における発話者の気持ちのレベルを反映する、主観的な言及値である。

以下の例（23）で、プロトタイプとなる「嬉しい」は、有界スケールの成立を示唆する「完全に」と共起している。毎週書いているコラムが「ザ・営業みたいなＭ浪さん」に読まれていることに対する、発話者の気持ちを反映している言及値が、「嬉しい」の有界点として挙げられている。その有界点の設定は、主観的である言及値によって動機づけられたことは、「フルネームじゃなくとも」の使用を通して、明示的に表されていると考えられる。

（23）この食べ歩きコラムも４年目に突入し、毎週毎週よく書けるもんだと自分でも感心してしまう。で、長く続けていると、ひょんな所で繋がったりする事もある訳で、先週はピンチヒッターで茨城取手国際のコンペに参加させて頂いたのだが、その表彰式で、とても楽しい、ザ・営業みたいなＭ浪さんから、『いつも読んでますよ！ほら、あの～・・博多なんとか！』。
いや、フルネームじゃなくとも、これはもう**完全に**嬉しい事である。
（http://www.yumebaku5.com/bakunoyume/blog/?p=12473）

また、例（24）で、発話者が「切手収集」という対象に対して持つ「懐かしい」気持ち、換言すれば、その気持ちを反映する言及値が、有界点として設定され、「完璧に懐かしい」のような有界的使用が容認されると考えられる。「私が小学生だった 40 年くらい前にブームでみんな結構集めていましたね」という説明から、「懐かしい」の使用と関わる有界点の設定が、主観的な言及値によって動機づけられることが分かる。

（24）切手収集は私が小学生だった 40 年くらい前にブームでみんな結構集めていましたね。**完璧に**懐かしいです。あの頃は今と違ってハイテクなゲーム機器も無く、娯楽の一環で何かを収集する事に夢中になり流行りました。

今は全く流行っていませんもんね。

（https://www.nyaoblog.com/entry/holder）

また、例（25）では、対象となる「COSMOS の音楽」に対する、発話者の亀山の気持ちによって、「好きな」が構成するスケールにおいて有界点が設定されていると言える。その有界点の設定が主観的な言及値によって行われていることは、「それで色々観ていくうちに俺と野田が完全に好きな音楽ってコレだなって思った」という発言を通して、明示的に表されている。

（25）−じゃあライブ観に行ってみるか！みたいな？

亀山：そうそう。それで色々観ていくうちに俺と野田が**完全に**好きな音楽ってコレだなって思ったのが COSMOS とかだったんだよね。

（http://www.straightup-rec.com/dfb-interview1.html）

そして、例（26）では、発話者が、「永久歯の虫歯の経験がない弟」に対して持つ気持ちの言及値が、「羨ましい」の有界点となっており、「全く羨ましい」の使用が容認される。その有界点の設定は、「一番歯磨きをし、おやつを食べないにも関わらず相変わらず虫歯ができた」という、発話者の経験によって動機づけられると言える。例（27）では、「いやなことを拒否する力がない子供の将来」に関する発話者の気持ちを反映する言及値が有界点として挙げられ、「全く心配」という有界的使用が容認される。主観的な言及値が有界点として設定されていることは、例えば「冗談で言っているのではありません」という説明からも分かる。

（26）大きくなって永久歯がそろってからは三人の中で一番歯磨きをし、おやつを食べないにも関わらず相変わらず虫歯ができました（後で虫歯菌が多い事が分かりました）。現在 17 歳の弟は永久歯の虫歯の経験がなく、奥歯の溝に予防的に詰め物がされているのみです。**全く**羨ましいです。

（https://www.minatomachi-dc.jp/2004/09/13/ 検診での思い出したこと /）

(27) 冗談で言っているのではありません。いやなことを拒否する力って、子供の時に培う必要があると思うのです。それが生きる力のひとつだと思います。親の敷いたレールに従って言われるままに学習もこなすのは、成績は短期的にいいでしょうが、将来が**全く**心配です。

(https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1133575886)

データ収集を行った結果、発話者による有界的使用が、原則として、全ての感情形容詞に適用できるのではないかと考えられる。ただし、実例に見える容認可能性の傾向から言えば、このタイプの有界的使用は、上記に取り上げた例（23)、例（24)、例（25）における「嬉しい」、「懐かしい」、「好きな」のような、ポジティブな意味を表す形容詞に対して容認されやすいようである。

５．おわりに

本稿では、日本語における「非有界形容詞」を対象として、程度性と主観性との関係を考察した。無標の文脈で、同様に非有界スケールを構成するものとして、日本語学研究で伝統的に区別される「属性形容詞」と「感情形容詞」は、主観性の役割の点で相違点を持つと思われる。「高い」のような属性形容詞は、対象に客観的にそなわっている特徴を反映する言及値と、発話者の主観的な判断によって設定される基準値を持つ。一方、「嬉しい」のよう感情形容詞は、基準値だけではなく、発話者の気持ちのレベルを反映する言及値も主観的な値となる。

従来、形容詞の程度性が変化する文脈もあると指摘されているが、そのような指摘は「有界形容詞」を指す傾向がある。本稿では、実例を元に、日本語の非有界形容詞も、「完璧に高い」または「完全に嬉しい」のように、有界的に使用される、有標文脈があることを明確にした。まず、対象が存在している客観的な文脈による有界的使用は、特に計量値として表現され得る特徴を表す属性形容詞の場合に可能である。一方、発話者の裁量、換言すれば主観性による有界的使用は、全ての属性形容詞と感情形容詞に対して容認されると考えられるのである。

このように、日本語の非有界形容詞が持つ程度性の特徴、特に有標となる有界的使用は、ランダムではなく、属性形容詞と感情形容詞では異なる、無標の文脈

における主観性の役割と深く関わることが明らかになった。なお、日本語の有界形容詞も、「とても完全な」のように、非有界的に使用される文脈があると観察されているが、このような使用に関しては、別稿で考察したい。

注

1　形容詞が独立したスケールを構成できるという考え方は、従来の研究においても見られる。Croft and Cruse（2004）が定義している「独立システム」（'biscalar system'）では、'hot' と 'cold' という反意語は、'COLDNESS' の「次元」と 'HOTNESS' の「次元」を描写する「スケール」を構成するとされている。

2　Paradis（2001）は、副詞のタイプに加え、「反対関係」（'oppositeness'）のタイプを基準に、英語の形容詞を、「非有界」でスケール性を持つ「スケール的形容詞」（'scalar adjectives'）、「有界」でスケール性を持つ「極限形容詞」（'extreme adjectives'）と「有界」でスケール性を持たない「限界形容詞」（'limit adjectives'）に分類している。

3　収集したデータを分析した結果、非有界形容詞の有界的使用として認められる文脈は、一般に「完全に」または「全く」のように、有界点との一致を示唆する副詞との共起によって成立することが分かった。詳しくは第 4 節で取り上げる実例の分析を通して説明するが、このような有界的使用では、言及値が有界点と一致していること、または有界点として設定されていることが発言される。なお、有界点との近接を示唆する「ほぼ」または「ほとんど」のような副詞を含む有界的使用の実例が少ない理由として、次の可能性が考えられる。実際の発話場面において、有界点との一致がない場合に、非有界形容詞と程度副詞との共起から見れば無標となる「とても」あるいは「非常に」の使用が可能であるため、有標となる「ほぼ」あるいは「ほとんど」の使用が必要とされない可能性がある。

参考文献

北原博雄（2013）「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』第 52 号 pp. 29-43

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学 10』むぎ書房 pp. 43-66

八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究 ―類型論的視点から―』明治書院

Croft, William and Alan D. Cruse（2004）*Cognitive Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press

Fleisher, Nicholas（2013）"The dynamics of subjectivity," Todd Snider ed., *Proceedings of the 23rd Semantics and Linguistic Theory Conference (SALT 23)* pp. 276-294

Kennedy, Christopher（1999）*Projecting the adjective: The syntax and semantics of gradability and comparison*, New York: Garland（University of California, Santa Cruz dissertation, 1997）

Kennedy, Christopher and Louise McNally（2005）"Scale structure and the semantic typology of gradable predicates," *Language* 81(2) pp. 345–381

Paradis, Carita（2001）"Adjectives and Boundedness," *Cognitive Linguistics* 12, pp. 47-64

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』（BCCWJ-NT）

チョルカ　ラルカ　マリア

（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程）

Bounded uses of unbounded adjectives in Japanese
The role of subjectivity

CIOLCA Raluca Maria

This paper analyses the unmarked and marked uses of unbounded adjectives in Japanese, drawing a distinction between the traditionally established classes of property adjectives and emotion adjectives. In Japanese, unbounded adjectives such as *takai* ('tall') or *ureshii* ('happy') can appear in structures such as *kanpeki ni takai* ('perfectly tall') or *kanzen ni ureshii* ('completely happy'), which suggest the realization of a bounded scale and should, thus, be regarded as marked in terms of gradability. Drawing on previous research, this paper explains such marked uses by demonstrating the role of subjectivity, interpreted as the intervention of the speaker in establishing the reference value and the standard value involved in the selection of each adjective in speech.

In unmarked contexts, both property adjectives and emotion adjectives are selected based on a standard value set through subjectivity. However, they are differentiated when it comes to the nature of their reference value. Adjectives such as *takai* refer to an objective property of the object they co-occur with and, thus, have an objective reference value, while adjectives such as *ureshii* describe the speaker's emotions and have a reference value dependent upon subjectivity. In marked contexts, property adjectives allow a bounded interpretation when the context including the object projects an objective boundary on the scale, but also when the intervention of the speaker establishes a subjective boundary. In the case of emotion adjectives, the bounded interpretations involve only a subjective boundary set through the intervention of the speaker.

By basing the analysis on real examples produced by native speakers, this paper demonstrates that the gradability features of unbounded adjectives in Japanese are not arbitrary. It is concluded that the role played by subjectivity in the selection of property adjectives and emotion adjectives in unmarked contexts motivates the type of marked bounded uses that both classes allow.